



LGBT(性的少数者)

教職員の適切な理解を

性的少数者(LGBT)の子たちへの理解を高めるため、2016年3月30日、文部科学省は、教職員向けに手引き「性同一性障害や性的指向・性自認に係る、児童生徒に対するきめ細かな対応等の実施について」を発表しました。これは、昨年4月30日の通知に続くもので、「性同一性障害」に加えて、今回は「同性愛」や「両性愛」についても明記されました。手引きでは、性的指向と性自認について「異なるもので、対応に当たって混同しないことが必要」と注意を促しています。学校現場ではまだ話題になることが少ないのですが、確実にどの学校にも関わる問題なので、一緒に考えてみたいと思います。

LGBTとは?

LGBTとは、以下の4つの英単語の頭文字を合わせたものです。

- ◆L: レズビアン(女性同性愛者)。同性を好きになる女性のこと
- ◆G: ゲイ(男性同性愛者)。同性を好きになる男性のこと
- ◆B: バイセクシュアル(両性愛者)。性別にかかわらず、同性を好きになることも異性を好きになることもある人のこと
- ◆T: トランスジェンダー(性同一性障害)。生まれた体の性別に疑問をもち、それを越えようとする人のこと。「体は男(女)」として生まれてきたけど、自分のことは女性(男性)として扱ってほしい」といった人のことだが、手術などで性を

変えることをすべてのトランスジェンダーが望むとは限らない。

人口の5〜7%程度がLGBT(性的少数者)であると言われています。30人の学級なら1人か2人いても不思議ではありません。性のあり方(セクシュアリティ)は十人十色です。

性自認と性的指向

テレビのバラエティ番組では、よくトランスジェンダーと同性愛をこちゃませに「おねえ系」などと称することがありますが、性自認と性的指向の話は別物です。

性的指向にかかわることであり、トランスジェンダーは、主に性自認にかかわることです。「性自認」とは、自分を女性だと感じるか、男性だと感じるか、などを指します。「からだ

が男(女)だから男(女)」と疑問を持ったことがない人が多いのですが、中には一致しない人もいます。そのような人がトランスジェンダーと言われる人です。そのような場合、からだの性に基づいて生活することに違和感やストレスを感じる場合があります。

「性的指向」とは、自分の性自認に対し、どのような性別の相手に恋愛感情や性的欲求を抱くかという方向性のことです。「異性が好き」に限らず、「同性が好き」「同性も異性も好きになる」ということです。これは、異常でもなんでもなく、人の性のあり方として対等・平等なものと認められつつあります。

人の性のあり方は、ほんとうに多様です。大切なことは、その人がLGBTのどれに当てはまるのかを考えるのではなく、その人が何に困っているのかを一緒に考える意識・態度を身につけることです。

学校生活の中で

★レズビアンの古川さん(仮名) 39歳

小学校で「中性」とからかわれるのが辛かった。中学校では、全般的に息がつまるような思いだった。いじめが日常的で安らげる場所が学校にはなかった。死んでしまおうと思ったこともある。制服のない高校に入学し、学問のおもしろさが生きる希望になったが、学校の先生に相談するなんて考えたこともありませんでした。

★ゲイの小林さん(仮名) 49歳

自分のセクシュアリティを自覚し、いわゆる「オカマ」と呼ばれる大人になることに、とても大きな表現できない恐怖を覚え、絶望感に浸っていた。「男同士そ

んなんしたらホモになるぞ」という先生の言葉が忘れられない。

しかし、小学4年ときの担任の先生は、「オカマとよばれることがとても嫌だ」という自分の意見について、学級会を1時間使って議論してくださり、クラスメートの反応が変わった。大変感謝している。

★バイセクシュアルの大林さん(仮名・身体は女性だが自分自身は男性か女性かを決められない) 40歳

小学校のとき、ズボンばかりはいていたら母親がママ友からいじめにあった。スカートを強要され、地獄のような日々だった。「レズ」と言う言葉はポルノの言葉だと思って、混乱し続けていた。だれかにLGBTについて間違いでもなく、ポルノの話でもないことを教えてほしいかった。

★性同一性障害(身体は女性、性自認は男性)の森川さん(仮名) 26歳

小学校のときは自分ではよくわからない感情があり、それを周囲に伝えられないことが苦しかった。中学校の時に周りとうまくいかなかった。高校の時に性別について打ち明けると「先生のまわりにもいる」と言われて救われた。タイツ以外の代替案を提案してくれて助かった。図書館に隣の本があれば高校まで悩むことはなかったと思う。LGBTのニュースについてなど情報提供がほしい。 (出典:「性はグラデーション」)

大阪市淀川区・阿倍野区・都島区
3区合同ハンドブック)

※裏面に続きます

教職員の適切な理解を

「LGBT（性的少数者）の子どもたちは、差別的な発言を見聞きする中で、傷つき、自分には社会に認められない」と思い悩み、誰にも相談できずいます。

そういった実態の改善に向けて、文科省は、2015年4月30日付の文科省通知の中で、つぎのように述べています。

学級・ホームルームにおいては、いかなる理由でもいじめや差別を許さない適切な生徒指導・人権教育等を推進することが支援の土台となる。」

悩みや不安を抱える児童生徒の良き理解者となるよう努めることは当然であり、日頃より児童生徒が相談しやすい環境を整えていくことが望まれる。」

心ない言動を慎むことはもちろん、一方的に否定したり揶揄したりしないこと、相談された際には、まずは悩みや不安を聞く姿勢を示すことが重要である。」

学校づくりを知るには

大阪市淀川区・阿倍野区・都島区3区の先生たちが作った「明日から学校で実践できることベスト10」を紹介します。

- ① 男女わけを見直そう！その色分け、本当に必要？
- ② 「さん」「ちゃん」って呼ばれたいくない子がいるかも…「さん」に統一しよう。
- ③ 図書館や保健室に本を置こう！学級だより、図書だよりでLGBTの本を紹介しよう。

④ 差別的な言葉を見聞きしたとき、どう切り返すか？咄嗟の一言を考えておこう。

⑤ 子どもが相談しやすい「安心」できる先生になろう。

⑥ 言葉づかいを見直そう！その言葉づかいOK？

⑦ LGBTのポスターを貼ってみよう。

⑧ ハンドブックの「卒業生の声」を読もう
前述の声です）

⑨ 職員会議や学年会議でLGBTについて話そう。

⑩ 日常生活で「当たり前」になってしまっているかもしれない自分の言動を見直してみよう。

20人に一人と言われるLGBT（性的少数者）は、外国の話でも、テレビの話でもありません。知らないだけで、もう出会っているかもしれません。知らないでは済まされない現状があります。

自分の担任している学級にもLGBT（性的少数者）の子がいると仮定して、教師として、どう振る舞っていったらよいかを考えていくことが必要ではないでしょうか。

まずは、私たち教師がLGBT（性的少数者）について、学んでいきましょう。

参考文献：「セクシュアリティNo.72」

「セクシュアリティNo.74」

（エイテル研究所）

退職者の声に 耳を傾けよう

尾北教労では、毎年、退職された教員へのアンケート活動を行っています。今年度も、多くの退職者から回答を寄せていただきました。

アンケートの中で、「誰もが安心して働き続けることができるためには、どのような改善をしたらよいと思われませんか。（健康面・勤務条件・教育環境など）」についての回答を紹介します。尚、《》は、補足説明として組合で加筆した内容です。

◆ 事務処理がもう少し減り、授業に力を入れられるようになるというと思う。

◆ 学級事務や教材研究ができる時間を増やす。（担当時間を減らし、空き時間を確保する。会議を減らす等）

◆ 行事の精選を積極的に行うとともに、完程度を気にして行事練習が多くなりすぎないよう、共通理解を図って取り組む。

◆ 部活動とくに運動部系で、勝利至上主義の傾向が強くなっていると思います。若い人が情熱を持って指導にあたることは大切なことですが、教材研究や学級経営にも力を尽くすため、疲労が蓄積しているように思います。

◆ 健康に働き続けられるように、諸条件を良くし、子どもたちのためにがんばれる職場でありたいです。

◆ 時間外勤務を極力減らす。
◆ 休暇（年休・育休・療休など）を取得しやすくする。

《療休…正式には「療養休暇」と言わ

れ、病気やけがなど身体面が不調のときに、1時間・1日単位で取得することができません。》

◆ 今回の熊本地震で、あらためて地域の中学校の位置づけを考えました。一応、耐震工事は終了していますが、内部構造もしっかり耐えるものなのか不安です。教育環境とともに、防災施設としてもしっかり整備してもらいたい。

《熊本地震では、県内の避難所のうち約70か所が損壊などのため使用できなくなりました。その多くが、公立小中学校でした。なぜ使用できなかったかというと、校舎や体育館を倒れないようにする耐震化は終了していたものの、建物の骨格部分でない天井や照明器具、外壁などの改修が終わっていなかったためです。》

尾北教労では、これらの貴重な意見を、校長会との懇談会や市町教育委員会交渉で生かして、誰もが安心して働くことのできる学校づくりをすすめていきたいと考えています。